報　告

日本伝統音楽の生演奏鑑賞による看護学生への感性教育の効果

梶　ひとみ[1)]　武内　和子[1)]　小濱　優子[1)]

要　旨

本研究は、看護基礎教育３年課程における「芸術・音楽」の授業に日本の伝統音楽の一つである津軽三味線のプロの演奏家による生演奏を取り入れ、学生の感想を分析することによって、学生の感性へどのような働きかけがあったのか、教育効果を明らかにすることを目的とした。その結果、学生の学びは【音】【楽器】【技】【表現】【経験】【想像力】【関心の広がり】という７つのカテゴリで構成された。これらの意味内容はそれぞれ関係性を持っており、関係性を結びつけているものは、生演奏から学生の感性が刺激を受けて生まれた「感動」と考えられた。感動の経験を通して音楽に対する意識や理解を深め、更に文化への関心を深めるなど幅広い効果が窺えた。音楽に触れ、感性を育むことは人間を深く理解するための大きな力になり得る。「生演奏」「津軽三味線」という特徴が学生に強い印象を与え、感性に働きかける教育効果があったと考える。

キーワード：看護学生、感性教育、芸術音楽、和楽器、生演奏

Ⅰ　はじめに

看護職は医療分野での知識や看護技術だけでなく、人間を深く理解するための感性の豊かさが求められる職業である。看護教育の分野では、幅広く文化・芸術などに触れることで感性を磨き、豊かな人間性を育むことを目的とした様々な試みがなされている。例えば文学、美術、書道、演劇、華道、茶道というカリキュラムからなる文化講座の開講[1)]や、短歌の鑑賞を教材に取り入れる[2)]などである。

Ａ看護短期大学においても、看護基礎教育のカリキュラムに「人間理解の基礎」という科目を置き、その中の選択科目の一つに「芸術・音楽」を取り入れ、幅広い視点での音楽授業を目指している。

その音楽の授業で取り上げている内容の一つに日本の伝統音楽がある。日本の伝統音楽を学ぶことの目的は、日本の文化、中でも美意識について考えることである。鳥越は著書の中で以下のように述べている。日本の文化は、花鳥風月を愛でるという自然との融和、沈黙や静けさを表現する音、散り際に美を感じるなど、独特の美意識を持つ。その美意識は現代生活の中にも無意識に存在している[3)]。

日本の伝統音楽は、現代を生き洋楽の中で育った若い学生にとっては比較的未知の領域である。と同時に彼らの意識下には日本文化の影響があるので感性を磨く体験としてふさわしいと考え、今回、プロの奏者を招いて、日本の伝統音楽のひとつである和楽器の生演奏を鑑賞する授業を企画した。学生の感想から、「感じたこと、考えたこと」を分析し感性教育の視点から和楽器の生演奏が学生の感性にどう作用しどのような教育効果があったかを明らかにしたいと考えた。

Ⅱ　研究の目的

看護基礎教育３年課程における「芸術・音楽」の授業に、日本の伝統楽器の一つである津軽三味線のプロの演奏家による生演奏を取り入れた。学生の感想を分析することによって、学生が何を感じ、何を考え、学生の感性へどのような働きかけがあったのか、教育効果を明らかにすることを研究目的とする。

Ⅲ　研究方法

1．研究期間　平成25年５月～10月

2．研究対象　Ａ看護短期大学３年課程１年生86名のうち、選択科目の「芸術・音楽」を受講し

1）川崎市立看護短期大学

ている出席者63名のうち、同意を得られた学生63名の感想レポートを対象とする。

3. 授業概要

1）授業実施日　平成25年5月X日　90分

2）対象者　A看護短期大学3年課程1年生86名のうち、選択科目の「芸術・音楽」（1単位30時間15回）を受講している出席者63名

3）授業テーマ　第5回「日本の伝統と音楽①」

4）授業内容

（1）日本伝統音楽についての説明（約30分）

・日本伝統音楽について学ぶ意義と動機づけ

・日本伝統音楽の概要

・三味線の位置づけ、ルーツ、伝来について

（2）ゲスト講師（津軽三味線演奏家S氏による演奏と解説）

演奏曲目：津軽あいや節、津軽よされ節、即興曲「奥の細道」から、七つの子、即興曲「津軽幻想」、津軽じょんから節（旧節）弾き語り

（3）学生が楽器本体とバチに実際に触れる体験、質疑応答

5）事後の課題レポート　授業終了後、課題レポート（自由記載　字数制限なし）を課した。課題提示文は「本日の先生の演奏を聴いて、感じたこと・考えたことを自由にお書きください」とした。課題レポートは当日授業後に回収した。

4. データ分析方法

データはExecelソフトを用いて、意味ある文章毎に入力・整理した。データの分析は、Berelsonの内容分析を用いて分析した。文脈単位は学生一人分の記録単位とし、記録単位は授業終了後、学生の課題レポートに「演奏を聴いて感じたこと・考えたこと」が表現されている主語と述語からなる1文章とした。記録単位を意味内容の類似性に沿って同一記録単位群にまとめサブカテゴリとし、それを意味内容からまとめられたカテゴリとして、内容を反映したカテゴリネームをつけた。記録単位の分類とカテゴリの命名は、「芸術・音楽」を担当する教員と看護教員2名で検討を行った。記録単位の意味内容の分類は、研究者間で討議を重ねながら繰り返し見直しを行った。

5. 倫理的配慮

「芸術・音楽」の科目全体の成績評価が終了後、研究の協力依頼についての説明を行い、既にこの科目の成績評価は終了していること、研究の途中でも協力を辞退できること、データは匿名化して入力し、個人が特定できないように配慮することを説明した。同意を得られた学生のデータを研究対象とした。

Ⅳ　研究結果

対象学生63名の感想レポートの記述内容は、397の記録単位に分類された。これらのうち「本日の演奏を聴いて、感じたこと・考えたこと」に関する内容が明確な395記録単位をデータとして分析した。この結果、同一記録単位群にまとめた17のサブカテゴリを意味内容から7つのカテゴリにまとめ、【音】【楽器】【技】【表現】【経験】【想像力】【関心の広がり】と命名した。それらに学生の具体的な記述を加え、表1に示した。なお、表1における「学生の具体的記述例」は記録単位ではなく記録単位の文中から、具体的内容を拾って入れたものである。

以下、カテゴリを【　】、サブカテゴリを《》として示し、各カテゴリの結果を述べる。

1カテゴリ【音】

《音色》《音量》《リズム》《歌・声》の4つのサブカテゴリで構成された。《音色(ねいろ)》の内容には、各種の楽音(がくおん)、楽音でない音、多彩な音があった。楽音とは音楽的な音を指している。具体的には「はっきりした力強い音」、「どこか落ち着ける音」、「高くて細いがキレイな音」であった。楽音でない音は、「濁った音」、「音にならない音」、「つぶれた音」、「ひずんだ音」等、多彩な音は複数

表1　学生が演奏を聴いて感じたこと、考えたこと

カテゴリ	サブ　カテゴリ	記録単位数	具体的な記述例
音	音色	51	はっきりした力強い音、どこか落ち着ける音、高くて細いがキレイな音
			濁った音、音にならない音、つぶれた音、ひずんだ音
			複数の音が出ている、いろんな音、複雑な音
	音量		マイクが無くても聴こえる　こんなに大きな音が出るとは
			音の大小があって飽きない
	リズム		バチで叩く音がアクセントに　リズムが良い　チッチッカッカッ
	歌・声		コブシが利いていた　よく通る声　三味線に合わせて歌う
楽器		38	3本の弦しかないのに沢山の音が出て不思議　このバチだから力強い音が出る
			楽器を分解できることに驚いた
技	奏法のテクニック	82	指の動きが速くプロの技だと思った　バチを逆さにする奏法に驚いた
	自在な演奏		即興演奏は色々な要素で作り上げることに感動　即興であんなに弾けるのが凄い
表現	多様な表現力	72	自由に演奏が出来る　喜怒哀楽、感情の全てを現すことが可能　演奏の姿に惹かれる
	エネルギー		ただただ迫力に圧倒された　何ともいえぬパワーをいただいた
	変化		次々繰り出される音の変化や繋がりの複雑さに衝撃を受けた
経験	初めての生演奏	58	生まれて初めて見聞きした　初めて間近で聴き鳥肌がたった　プロの演奏は新鮮で感動
	貴重な体験		持ってみると意外に重くびっくりした　演奏にも力が必要だと感じた
			貴重な機会でよい体験ができた
想像力	比較	60	エレキギターに匹敵する　ピアノなどには出せない特徴
			他のジャンルにはちょっと無い感じ　ジャズを思い出した
	イメージ変化		静→動　堅苦しい→自由　古さ→新しさ
			興味がわいた　身近に感じた
	和を感じる		日本の風情を感じた　懐かしさや伝統　日本的な感じ
関心の広がり	今後の関わり	34	自分も弾いてみたい　今日の三味線の音を忘れず感性を豊かにしていきたい
	新たに得た知識		音楽は時代や土地に合わせて形を変えていくものだ　知らなかったことを知れた
			元はぼさま(盲目の男の門付け)の三味線が主流　津軽の芸人の話

計 395

の音を聴きとったもので、「いろんな音」、「複雑な音」等であった。《音量》の内容は音の大きさや強弱の差と変化で、具体的には表1の通りである。《リズム》の内容はバチで叩く音から生まれるリズムについて書かれたもので、具体的には「バチで叩く音がアクセントになっていた」、「リズムがよい」等であった。《歌・声》の内容は演奏の中に含まれた、歌の部分、弾き語りの歌声に関するもので「コブシが効いていた」、「よく通る声」、「三味線に合わせて歌う」等であった。

2カテゴリ【楽器】

楽器に関する内容をまとめた。胴体・弦・バチといった楽器の形や仕組みについて、楽器の作りとそこから生まれる音についての内容で、「3本の弦しかないのにたくさんの音が出て不思議」「このバチだから力強い音が出る」「楽器を分解できることに驚いた」等であった。

3カテゴリ【技】

講師の三味線演奏(歌を含む)の技について《奏法のテクニック》《自在な演奏》から構成され、内容は「指の動きが速くプロの技だと思った」、「バチを逆さにする奏法に驚いた」等や、「即興であんなに演奏出来るのがすごすぎて心を奪われた」などの称賛、驚きだった。

4カテゴリ【表現】

《多様な表現力》《エネルギー》《変化》のサブカテゴリで構成された。《多様な表現力》は「自由に演奏が出来る」「喜怒哀楽、感情の静動全てを現すことが可能なのではないか」「音だけでなく演奏している姿にも引き寄せられた」等、《エネルギー》は「迫力が凄かった」、「何ともいえぬパワーをいただいた」、《変化》は刻々と変化する演奏表現に対して「次々繰り出される音の変化や繋がりの複雑さに衝撃をうけた」という内容であった。

5カテゴリ【経験】

《初めての生演奏》《貴重な体験》から構成され、内容は《初めての生演奏》では「生まれて初めて見聞きした」、「初めて間近で聴き鳥肌が立った」など、《貴重な体験》は実際に楽器に触れて「持ってみると意外に重くびっくりした」「演奏にも力が必要だ

と感じた」等であった。

６カテゴリ【想像力】

《比較》《イメージ変化》《和を感じる》のサブカテゴリで構成された。《比較》の内容は自分の知っている楽器、様式、ジャンルとの比較で、「エレキギターに匹敵する」、「ピアノなどには出せない特徴」、「他のジャンルにはちょっとない感じ」、「ジャズを思い出した」などであった。《イメージ変化》は感じ方や考え方の変化がおこったことに関する内容で、「今までのイメージは”静”が強かったが今日実際に聴いてみて”動”になった」、「古臭さより新しさを感じた」、「今まで親しみがなかった三味線が少し身近に感じた」等であった。《和を感じる》は「日本らしさ」「和」を感じたという内容で、具体的には、「日本の風情を感じた」、「懐かしさや伝統」、「日本的な感じ」等であった。

７カテゴリ【関心の広がり】

《今後の関わり》は今回の経験から今後に向けて考えたことで、「自分も弾いてみたい」「今日の三味線の音を忘れず感性を豊かにしていきたい」等、《新たに得た知識》は楽器の変遷、担い手の変化など歴史などの知識に関する内容であった。

このように７つのカテゴリ化が出来たが、それぞれの学生の表現の中には「感動した」「心を奪われた」「心地よかった」「鳥肌が立った」などの感情を表す言葉が多数あった。

Ⅴ　考察

学生が体験を通して得たものを分析し教育効果を明らかにするために、まず今回の分析結果から得られたカテゴリの関係性について以下に述べる。その上で、体験を通した教育効果について考察する。

１．７つのカテゴリの関係性

生演奏の学びを明らかにし、カテゴリの関係性を分かりやすく示すために、その関係を図1に表わした。

カテゴリ【音】の《音色》《音量》《リズム》《歌・声》について、学生が多種多様な音を聴き取っていることが結果から捉えられた。カテゴリ【楽器】も、見たままの印象や次々繰り出される奏法に対する驚きが率直に書かれていたことから、学生が聴こえたもの、見えたものを素のままにととらえ、生演奏から受け取る最も基本となる土台と考えられたので、図の土台の部分に【音】と【楽器】を配置し、「見て、聴いたこと」という言葉を加えた。

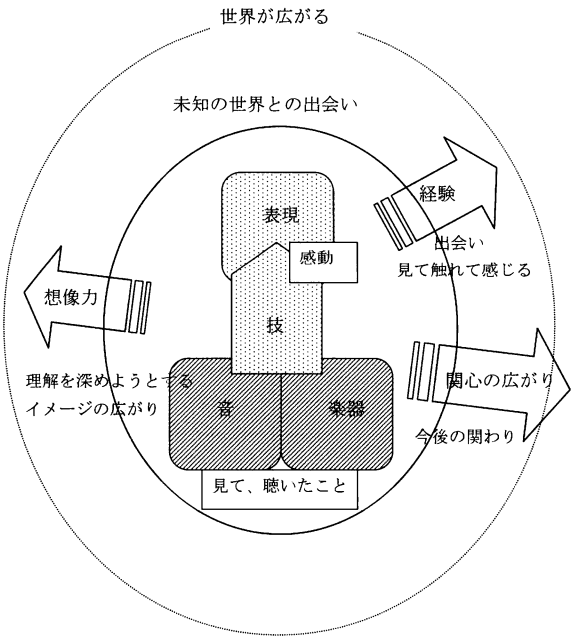

図１　７つのカテゴリの関係図

次に【技】と【表現】は上記の音や楽器という基本要素が演奏という行為、すなわち【技】によって【表現】された「音楽」と考えたので矢印の図形で表した。【技】ではテクニックに対する驚きと称賛、自在な演奏に対する感動が書かれており、【表現】では《多様な表現力》《エネルギー》《変化》といった音楽が生み出したものに対して心を動かされた様子が窺われた。例えば「次々繰り出される音の変化やつながりの複雑さに衝撃を受けた」「演奏を聴いてみてただただ迫力に圧倒された」などの記述例が挙げられる。このことから、学生が心豊かに感動していると考え、音楽から受ける「感動」という言葉を図の中に置いた。

【経験】の《初めての生演奏》は、学生にとって未知の世界との出会いであると考え、「学生の世界」から「世界の広がり」へと内側、外側の円で表した。《貴重な体験》からは、自分の手で実際に触れ、間近で見聞きした体験を貴重なものと考えていることがわかった。

【想像力】《比較》では、津軽三味線という未知の世界に対し、自分の知っている経験のあるもの、例えばピアノやギター等の楽器やジャズ等のジャンルと比較することで理解を深めようとしていることが窺えた。《イメージ変化》は、結果の例が示す様に、演奏を聴くことで自分の持っていたイメージが変わったり、興味や親しみにおいて学生自身の世界が

広がったことが見てとれる。《和を感じる》は全体から感覚的に日本の風情や日本的な感じをとらえており、「懐かしさを感じる」という記述もあることから意識下の日本文化の影響に対する気付きの経験になったと考えられる。このように学生の様々なイメージの広がりが捉えられたので、同じく矢印で表した。

【関心の広がり】では《今後の関わり》における、「自分も弾いてみたい」、「もっといろいろ聴いてみたい」また、《新たに得た知識》における「自分の知る事がなかったことを知ることが出来た」「音楽というものはそうやって時代や土地に合わせて形を変えて行くものなんだと思った」等の記述から、「考えたこと」が外に向かって広がっていると考え、矢印で表した。

以上、図で示したように、様々な学生の「気付き」「得たもの」が繋がりと広がりを持っていることが分かる。和楽器の生演奏の体験という未知の世界との出会いは学生たちの考える力や想像する力を刺激し、彼らの世界を広げる原動力の中心には「感動」があったと考えられた。

2．芸術によって育まれる感性

ピアニストである江戸[4]は「音楽は人間の感性の発露であり、聴くものに哀しみや歓びといったさまざまな感情を呼び覚ます」と述べ、「はじめに」で例を挙げた短歌鑑賞を看護教育に取り入れた杉山[2]は「短歌の鑑賞によって、さまざまな状況や多様な人間存在にふれることもできる。人はそれぞれ、かけがえのない生活や人生を生きていることが感動を通じて感じられる」と述べている。このように、音楽（を含む芸術）を通して自分が経験したことのない激しさや静けさ、喜びや悲しみや怒りなどのさまざまな世界を想像することが可能となる。音楽（を含む芸術）にふれることは個人の経験を越えて人間を深く理解するための大きな力になり得ると考える。

民族音楽学者の小泉[5]が「ある民族の音楽文化は音楽だけで成り立っているものではなく、言葉だとか、さらには自然環境、歴史的風土、社会的慣習など、要するに、その民族の文化全体と密接な関係の中で育ってきている」と述べているように、音楽はその土地の文化に、また個々の人生の様々な場面における感情につながっており、人は音楽を通して人間の営みの背景のあらゆるものに想いを馳せることが出来、自分の知らない世界へ目を向けるきっかけともなる。そして音楽は、説明や押し付けでなく、感性に働きかけて感動をもって人の心に響くと考える。山岸[6]は、「感性とは、人間、個人、個人の感覚的個性、感覚によって意味づけられた、方向づけられた身体的で人格的な人間性なのである。（中略）感じること、それは人間の人間らしい姿だと思う。感じることにおいて生きていること、人間としての存在が、はっきりと自覚されるのではないだろうか」と感性の重要性を述べている。心に響く体験を繰り返すことは、感性の引き出しを増やし、他者の心を想像したり受け入れたりという、より深い人間理解につながっていくものと考える。

3．日本伝統音楽の生演奏による教育効果

今回の分析結果から、学生はカテゴリに示したような多岐にわたる視点から、和楽器の演奏に対して各自の感性で柔軟に伸びやかに受け止め、多様な記述をしていることがわかった。その内容から、生演奏によって、まだ若い学生が自分の経験したことのない多くの刺激を受け、各自が様々なものを感じ取り、音楽に対する意識や理解、文化への関心等にも考えを広げていることが窺える。結果の最後に示したように、学生の記述には多くの感情を表わす言葉が見受けられた。感動した、心を奪われた、心地よかった、鳥肌が立った、懐かしかった等、内容も幅広いものであった。このことから演奏が感動をもって学生の感性に働きかけたと考えられる。

次に今回の試みの特徴である「生演奏」と「和楽器・津軽三味線」を用いた教育効果について次の2点から述べたい。

1）生演奏の魅力

今回の分析で、学生は【経験】の中で《初めての生演奏》に驚き、感動していることが明らかになった。「初めて間近で聴き鳥肌がたった」「プロの演奏を聴く機会はなかったので新鮮で感動した」などが記述例である。岡部・鈴木[7]は児童教育の分野で、生演奏を取り入れ、単なる鑑賞だけでなく対話や体験を重視した授業の効果を報告している。それによると、生演奏ならでの魅力を感じ取り音楽に対する意識や理解が深まった、演奏家の姿勢を感じ取ることで自身の向上心が高まり、学習意欲が喚起されたと述べている。この報告は今回の研究にも通じるものがあり、講義として説明した場合や、CD・DVDなどを使用した場合では得られない生き生きした感想が寄せられている。それは、カテゴリ【経験】に

まとめられたもののみならず、全てのカテゴリにおいて実際によく見聞きしなければ捉えられないことがらを捉えており、【表現】における「音楽に対する意識や理解の深まり」、【技】における「演奏家の姿勢を感じ取ること」、【想像力】【関心の広がり】における理解や関心の深まりなどを例に挙げることができる。また、茂木[8]も「音楽における体験の豊かさや感動の深さという点では、”ライブ＝生演奏”に勝るものはない」と生演奏の重要性を述べており、今回も和楽器演奏を生で行ったことが豊かさを導いたと考える。

2）津軽三味線の魅力

和楽器の中でも津軽三味線は、日本文化独特の味わいと同時に現在も発展途上の自由さを持ち、日本伝統音楽の中でも独特な位置にある。津軽三味線は江戸末期に発生し、はじめは津軽の坊さま（盲目の男性）の門付けであったものがやがて津軽の芸人の手によって舞台で聞かせる芸に発展した。それが民謡歌手とともに上京しレコーディングによって日本中に知られるようになる。民謡ジャンルから生まれた三味線でありながら、リズム、テンポ、迫力等の演奏技法が工夫され発展してきた楽器であるため若い人達の間でも人気となった。即興性が高く、奏法も本来の津軽三味線以外のものがどんどん取り入れられ、他の楽器、ジャンルとのコラボレーションも盛んである[9]。

伝統音楽の流れを汲みつつも、バチで楽器を叩き、楽音でないひずんだ音やつぶれた音を取り入れるところは前衛的な音楽にも通じ、また即興による自由な演奏もジャズをはじめ現代の音楽にも通じる。津軽三味線は現代を生きる学生にとって遠くて近い魅力的な鑑賞楽器の選択だったと考えられる。

学生は、津軽三味線の「楽音にならない音」＝噪音を聴き取って挙げている。そしてそれらを含めて、「複雑な音」、「多彩な音」ととらえていた。日本音楽では、噪音と言われるこの楽音以外の音は大きな特徴であり、魅力のひとつであるといわれる。千葉[10]は「日本音楽は様々な音色を十分に味わうところに真髄があり、日本の楽器は一般的に倍音を含んだ音色を出すが、更に噪音を含んだ音が好まれる」と説明している。また、津軽三味線はバチで胴を叩く奏法が特徴であるが、叩いて出される音を「チッチッカッカッ」という音色や「良いリズム」として捉えている。これらのことから、津軽三味線は若い学生達の心を惹きつけ、日本音楽の神髄にも通じる音を聴きとる力、見つける力を高める効果があったことが窺える。

Ⅵ　結論

今回、和楽器の生演奏を鑑賞した看護学生の感想を内容分析した結果、次のような結論が得られた。

1．学生の「感じたこと・考えたこと」は7つのカテゴリで構成され、【音】【楽器】【技】【表現】【経験】【想像力】【関心の広がり】であった。これらの意味内容はそれぞれ関係性を持っており、関係性を結びつけているものは、生演奏から学生の感性が刺激を受けて生まれた「感動」と考えられた。

2．1にまとめられた内容から、今回の授業において感動の経験を通して音楽に対する意識や理解を深め、演奏家をプロとして称賛し、更に文化への関心を深めるなど幅広い効果が窺えた。音楽に触れ、感性を育むことは人間を深く理解するための大きな力になり得ると考えられる。また今回の「生演奏」「津軽三味線」という特徴が学生に強い印象を与え、感性に働きかける効果があったと考える。

Ⅶ　おわりに

本研究は看護短期大学3年課程1年生の前期（5月）の授業をもとに検討を行ったが、対象者は1つの学年であり対象者数も少ない。看護教育の中に感性教育としての「芸術・音楽」を取り入れ、効果を得て行くためにはさらなる検討の継続が必要である。今後の授業展開や研究の課題としていきたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました津軽三味線演奏家S氏、学生の皆様に深く感謝致します。

引用・参考文献

1）梶原祥子他．文化講座における学生の学習成果と評価　東邦大学医療短期大学紀要　第 15 号　2001 P.60-68

2）杉山喜代子．短歌の観賞から看護教育へ　看護教育　6.2012 p.506-509

3）鳥越けい子．サウンドスケープ　その思想と実践　鹿島出版会 ,2004, p.13-16,22-24

4）江戸京子．音楽と労働―アリオン音楽財団のとりくみ　日本労働研究雑誌　No.549 4.2009

5）小泉文夫 , 團伊玖磨 . 日本音楽の再発見　平凡社，2001

6）山岸美穂 , 山岸健　感性と人間―感覚 / 意味 / 方向　生活 / 行動 / 行為―三和書籍 ,2006, p.54-55

7）岡部裕美 , 鈴木香代子 . 学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性―継続的なアウトリーチ活動の事例を追って―　千葉大学教育学部研究紀要 , 第 58 巻 ,2010,p.109-120

8）茂木健一郎 . すべては音楽から生まれる　脳とシューベルト PHP 研究所 ,2008

9）佐々木壯明 . 津軽三味線、これからどうする？ 雑誌「みんよう春秋」5 .2000

10）千葉優子 . 日本音楽がわかる本　音楽の友社 ,2006,p.15-16